

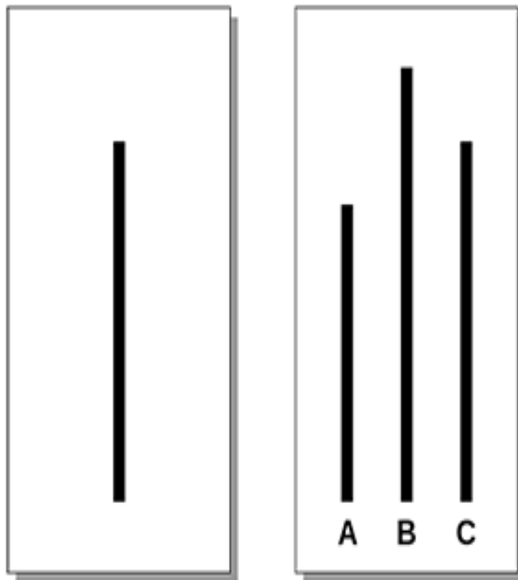
ソロモン・アッシュの実験

「私たちは、こんな実験をしたのです」と、ソロモン・アッシュ教授は、黒板にタテの線をかいた。左に1本、右に3本。—ニューヨーク郊外にあるラトガー大学の研究室。

「右の3本のうち、どれが左の線と同じ長さかを当てさせる、という実験なのです」

「錯覚の実験ですね」

「とんでもない。左の1本が20センチなら、右には、16センチ、20センチ、17センチの3本、というように、だれが見ても間違えっこないような組み合わせにしてあるんですよ」



「

それでは、だれでも正しい答えをするはずでしょう」

「それが、そうではないんです」と、アッシュ教授は、実験のこまかい手順を話し始めた。

6人から8人の学生が、まず“サクラ“に仕立てられた。この学生たちは、あらかじめ決められた通りに、全員が同じ答えをするようになっている。18問のうち、第1問、第2問には正しい答えをするが、3問目からの16問のうち12問については、わざと間違った答えをする手はずなのだ。

そこへ、実験される学生が連れてこられる。もちろん、まわりの学生がみんなサクラとは知らない。

ここで、もうひとつ手が加えられた。サクラたちに、サッと前のほうのいすを独占させてしまい、前のほうから順に答えさせるのだ。つまり実験される学生は、最後のほうでしか答えを述べられない仕組みにした。

こうしておいて、さきの問題を出す。サクラたちは、ときには断固として、ときには少しあやふやな態度で、間違っただけの答えをする。

「多くの学生は、カラクリを見破って笑い出すんじゃないかと心配したのですが、そんなことはありませんでした。それどころか、人をだますのは、なんとたやすいことか、と驚きました」と教授は続ける。

123人の学生のうち、すべての答えを誤らなかった者、つまりサクラの答えに引きずられず、自主性を守り通したのは、わずか29人（24パーセント）だった。あとは大なり、小なり、サクラの意見に従った。27パーセントの学生は、12問のうち8問以上もサクラと同じように答えた。

「人間の心の弱さを知って、暗い気持ちになったのですが、次の実験では、またびっくりしました」と教授。

こんどは、サクラの中の1人にだけ、みんなと違う答えをいわせることにしたのだ。サクラ6人が正しい答えを出して、1人が間違っただけの答えをするということもあり、その逆もあるわけだ。こうすると、実験学生は、ほとんど間違えず、正しい答えをするようになった。つまり、自主性が回復し、多数派の意見に引きずられなくなったのだ。

この実験のあと、学生たちは「みんなと意見の違う人が1人いたので気持ちがラクでした」と話した。

1人のサクラが、かりに自分と違った意見であっても、多数派に反対するのが自分1人ではないとわかっただけで、学生たちは「ラクな気持ち」になり、自主性を失わなかったのだ。

「ただ1人の勇敢な反対者が、集団の意見形成にどれほど重要な役割を果たすか、ということが、この実験でわかりました。反対派のサクラを2人、3人とふやしてみる実験は、もはや、やってみるまでもありませんでした」

たまたま、教授の机の上には、反戦学生と警官隊との衝突を報じた新聞があった。教授は、それを手に取っていった。

「この学生たちがアメリカの社会のなかで果たしている役割は、きわめて重要です。このような反対派がいないと、アメリカも、かつてのナチみたいになってしまうでしょう」

（■反対派■『こころのプリズム』（朝日新聞社刊）より）